

## 文化・芸術

「ton paris (トンパリ)」から  
「サルンに日本人の人々集る」

1930、33年、色鉛筆、紙  
22・2センチ×15・1センチ

茂田井 武 (1908～56年)

児童文学へ挿し絵などを描いた画家、茂田井武の作品です。23歳の時、ほぼ一文無しでパリにたどりついた茂田井は、セルクルジャポネ(日本人クラブ)の食堂の皿洗い兼ボーイとしてさっそく働き始めることとなります。絵日記的に描き記した画帳「ton paris」の初期には、日本人クラブ内にある部屋や娯楽場の様子を描いた作品が多いです。

本作は、その画帳の中の一点です。赤と青でシンプルに構成されながらも、色鉛筆のやわらかなタッチが画面にひろがりをもたらしています。英字スタンプが小さく押されているのも、アクセントとしておもしろいですね。今からおよそ89年前のパリで、どんな日本人同士の出会いがあったのでしょうか。描かれた窓ひとつひとつに物語があるように感じられます。

現在、大川美術館は展示替えのため休館しております。25日から常設展示ならびに特集展示「茂田井武『ton paris』、記念展示「峻介のアトリエ再見」をご覧ください。

(池田)

《名画の扉》

大川美術館特集展示から

